

## P2-024

## 乳幼児をもつ母親が子どもとの生活で喜びを感じるきっかけは何か

吉川はる奈、吉山 怜花、諸山 美咲

埼玉大学 教育学部

## 【目的】

現代は、核家族化の進行などにより母親になる以前に子どもと関わる経験ができず、子育てをすることが難しい時代であると指摘されている。子育てによって生じる感情はネガティブなものばかりでなく楽しい、嬉しいもふくめ多様な感情が存在するが、本研究では現在乳幼児を子育て中の母親が子どもとの日常生活の中で感じる喜びのきっかけを整理し、子どものいる生活を肯定的に捉える環境条件を明らかにすることを試みる。

## 【方法】

乳幼児を子育て中の母親を対象にした聞き取り調査（24歳～43歳までの母親13名）。調査時期は2015年8月～2016年2月

## 【結果】

1. 「子育ての中で楽しいと感じる時」についての回答はさまざまな場面が挙げられたが、「子どもの成長を感じる時」が33%を占め最も多かった。さらにどんな時に「子どもの成長を感じるのか」に対しては、「言語が発達した時」が28%を占め、最も多かった。言語が発達し子どもが少しずつ言葉を話せるようになりコミュニケーションを取れるようになることが母親にとって嬉しく喜ばしいことであると推測された。逆に子どもから言葉が思うように出てこない母親の心配が増すといえるだろう。子どもが健やかに成長している実感は、母親に大きな安心感を与え、自分の子育ては間違っていないという自信に繋がるのだろう。「子どもの成長が実感できること」は母親が子育てに喜びを感じる要因に大きく影響していると考えられる。2. 「子どもがかわいと感じる時」についての回答では、「子どもが母自身に甘えてくる時」が最も多く41%を占めていた。子どもが母自身に甘えてくることは母親に信頼を寄せている証しであり、母親にとって子どもから必要とされているという満足感を得るのだろう。母親は子どもに対してイライラする・疲れる等の否定的な感情を抱え葛藤しながらも、子どものポジティブな反応を受け取ることで少しずつ子どもや子育てに対して気持ちが肯定的なものに改善されていくのだと考えられる。子どものポジティブな反応が母親としての使命感を与え、親としての喜びや自信に繋がっているのだろう。3. 「子育ての中で大変だと感じる時」については、「子どものしつけ・生活習慣のこと」が最も多く44%を占めていた。「困った時に相談する内容」では「子どもの病気・健康について」が46%を占め最も多かった。

## P2-025

## 居住形態別にみた災害・事故防止に関する乳幼児の親の意識と行動

三木 祐子<sup>1</sup>、梶原 祥子<sup>2</sup>、鈴木 香代子<sup>1</sup>、織田 正昭<sup>3</sup><sup>1</sup>東京有明医療大学 看護学部 看護学科、<sup>2</sup>帝京大学 医療技術学部 看護学科、<sup>3</sup>福島学院大学 福祉学部 福祉心理学科

## 【目的】

近年、都市部では集合住宅が増加傾向にあり（総務庁,2008）、それに伴い乳幼児など年齢の低い子ども達も多く居住している。快適な住環境が提供される一方、転倒転落等の事故や地震・火災等、災害時対応についての指摘もある。従って本研究では、居住形態別にみた災害・事故に対する乳幼児の親の意識と行動を明らかにし、今後の育児支援内容の検討の一助とすることを目的とする。

## 【方法】

平成27年11月に都内の幼稚園・保育園において、乳幼児をもつ親を対象に調査の趣旨を明記した質問紙を配布した。76名より回答があり、質問紙の提出をもち調査に同意したとみなし分析対象とした。有効回答率は36.2%であった。なお本研究は研究者の所属大学の倫理審査委員会の承認を受けた。

## 【結果】

1. 対象者の概要 回答者（親）は母親が97.4%と最も多く、居住形態は集合住宅居住者34名（44.8%）、戸建住宅居住者41名（53.9%）、無回答1名（1.3%）、集合住宅の平均居住階数は5.3±3.7階（居住階数1-16階）であった。また1世帯あたりの子どもの平均人数は1.9±0.9人、本研究対象の子どもの平均年齢は4.2±1.7歳であったが、居住形態別の有意差はなかった。2. 災害・事故防止に対する親の意識と行動 子どもに対する親の事故防止内容は居住形態に関係なく「交通事故」が最も多かった。交通事故の選択者のうち戸建の方がその割合が高く、実際に事故防止対策を行っている者が多かった。一方、現在の居住地や居住形態において災害時に最も気になる内容は、集合住宅では「避難時に子どもと共に行動すること」「家族内で連絡をとること」の順に多かったが、戸建では逆であった。また、集合住宅では親の近所付き合いが盛んであるが、平・休日の外出回数はいずれも戸建の方が多く、特に休日では有意差がみられた。災害・緊急時の連絡や避難方法は集合住宅の方が家族内で決めている者が多かったが、避難訓練では居住形態に関わらず「全く参加しない」が最も多く、理由として「もともと訓練がない」「いつ行っているのか知らない」が殆どであった。

## 【考察】

本研究では、親の近所付き合いや防災への意識が住宅構造の特徴を反映しているのにも関わらず、実際の親の防災行動と伴わないこと、住宅や地域における危機管理の周知徹底が十分でないことを示唆した。また未就学児の親にとって、交通事故の問題は居住地や居住形態に関わらず避けがたいものであると考えられた。